

いわゆる「南京大虐殺」と「通州事件」

「史実を世界に発信する会」 会長代行 茂木弘道

東京裁判で突如でてきた「南京大虐殺」

東京裁判で突如持ち出されたのが「南京大虐殺」である。昭和12年12月13日に日本軍は中華民国首都南京を陥落させたが、入城した日本軍が30万の中国軍民を殺害したという告発である。

判決では、「南京が占領された後、最初の2、3日の間に少なくとも1万2千人の非戦闘員である中国人男女子供が無差別に殺害され、占領の1か月の間に約2万の強姦事件が市内に発生した。また一般人に成りすましていた中国兵を掃討すると称して、兵役年齢にあった中国人男子2万が集团的に、更に捕虜3万以上が武器を捨てて降伏してから72時間のうちに殺害された。なお、南京から避難していた市民のうち5万7千人が日本軍に追いつかれて収容され、彼らは飢餓と拷問にあつて、ついに多数のものが死亡し、生き残った者のうちの多くは機関銃と銃剣で殺された」と結論されている。

多くの日本人にとってはまさに寝耳に水であった。何しろ、南京に日本軍が入城した時には150人もの記者・カメラマンなどがそれを追って南京に入り精力的に取材を行い、写真とともに記事を送ってきていたからである。

南京は城壁に囲まれた都市で、城壁の長さがちょうど山手線と同じ長さで、面積は山手線の内側の8割ほどなので、150人の記者・カメラマンは市内狭しと駆け回って取材していたのである。

その代表的な記事が東京朝日新聞の12月20日号に掲載された河村特派員撮影の1ページを使った組み写真「平和甦る南京」(写真参照)である。朝日には次々この連載版が掲載されている。「きのふの敵に温情<南京城内親善風景>」(12月22日)(写真参照)、「南京は微笑む<城内点描>」(12月25日)、「手を握り合つて越年<日に深む南京の日支親善>」(12月30日)、「5色旗の下に<南京復興の足取り>」(2月13日)といった具合である。朝日が特別ではなく、他の新聞雑誌も似たような報道である。

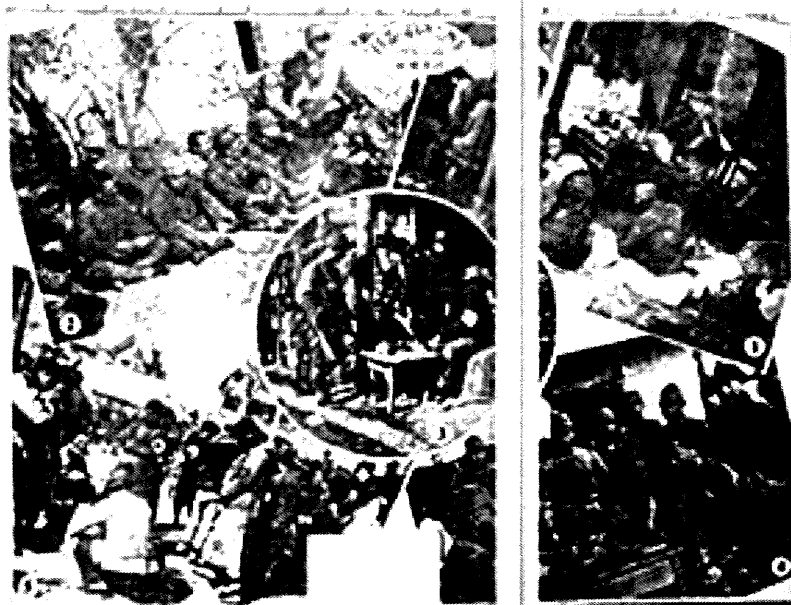
こんなところで、どうして殺人、それも大量虐殺など起こり得るのか、人々が仰天するの無理はなかった。

しかし、GHQによる徹底した言論統制、日本軍の犯罪行為プロパガンダ、そして東京裁判(これを「文明の裁き」と横田東大国際法主任教授は呼んだ)による断罪などによって、「歴史的真相」にされてしまったのである。教科書までが「国民はこういう事実を知らされなかった」書くありさまである。左翼は日

「平和甦る南京」
東京朝日新聞(昭和12年12月20日号)
12月17日河村特派員撮影



「昨日の敵に温情」
東京朝日新聞(12月22日号)
河村特派員撮影



本・日本軍弾劾の証拠であると機会あるごとにこれを取り上げた。

「南京事件」すらなかった

では「南京虐殺」なるものの実態はどうのようなものだったのだろうか？

結論的に言えば、「南京戦」はあり、日本軍が圧勝して大量の中国兵が戦死したが、「南京虐殺」はおろか「南京事件」なるものも存在していなかったというのが実態であった。

その証拠の第1は、『チャイナ・イヤーズブック』1938年版の記述である。上海のノースチャイナ・デイリー・ニューズ・アンド・ヘラルド社が発行する伝統ある英字年鑑である。この年鑑の1937年出来事の要約ページに12月13日、日本軍南京占領と書かれている。それだけである。ところが過去の主な出来事のところに、1927年3月24日、南京暴行事件と書かれているのである。これは国民党革命軍が南京の日米英領事館を襲った事件のことである。

すなわち、「南京事件」なるものは1927年に起こっているだけで、1937年には起こっていないということを権威ある英字年鑑は語っているということである。南京戦があり、日本軍が入城した。しかし、そこで虐殺はおろか、「南京事件」と呼べるようなことも起こっていなかったということを経典の一流年鑑が述べているということである。日本の新聞などの報道が真相を伝えていたことの傍証にもなるわけである。

第2の証拠は、台北の国民党史館で東中野修道教授が発見した「国民党宣伝部国際宣伝処工作概要1938～1941」である。「極機密」印のついた国民党の内部向け資料なので宣伝色は薄く実態が記述されているとみることができる。ここに南京戦を挟む11か月の間に国際宣伝処は南京から避難した漢口において300回の記者会見を外国人記者を集めて開いたことが書かれている。

日本軍の悪行を外国人記者に宣伝することを目的としたこの300回の記者会見で、南京で日本軍が市民虐殺を行ったとだか捕虜の不法殺害を行ったとか、ただの一度も発表していないということである。「虐殺あった信者」には信じられない事実が国民党内部資料には記述されているのである。

第3に同時代資料として『南京安全地帯の記録』(Documents of Nanking Safety Zone)がある。南京に残った外国人が組織した国際委員会が日本大使館あてに出した抗議文・依頼書その他活動記録を国民党の国際問題委員会が監修して上海のKelly & Walsh社が発行した英文書である。貴重な一次資料である。

ここには殺人が26件記録されているが、そのうち目撃のあったものは1件のみである。その1件も合法的なものと注記されている。つまり、目撃のある不法殺害は1件も載っていないのである。虐殺が横行していてこんなことがあ

るはずがない。

『南京安全地帯の記録』には、南京の人口について触れたところが11か所でてくる。これによると、12月中はずっと20万人で、1月14日以降25万人となっている。虐殺で人口が減ったなどという認識が国際委員会メンバーの中でゼロであった証拠である。

まだまだある虐殺などなかった証拠資料

捕虜の殺害という虐殺があったのではないか、という人があるかもしれない。事実、歩兵第7連隊は安全地帯に軍服を脱ぎ捨てて逃げ込んだ中国兵を12月13日～16日の掃討戦で摘発し6670名を処刑したことを戦闘詳報に書いている。国際委員会はこれを知っていたが、数十回にわたる日本大使館に提出した批判書で、これを国際法違反と非難していない。

4月になって東京のアメリカ大使館付きコーヴィル武官が南京に事情調査にやって来た。南京の英米独の外交官やノッチに述べるが市民1万2千殺害説を『戦争とは何か』に書いたり、東京裁判で証言したったりしたベイツ教授たちと詳しい意見交換を行い、その記録が残っているが、市民、そして捕虜の不法殺害を全く書いていない。つまり、当時全く不法とされていなかったことを今になって虐殺だと騒ぎだすのは愚かとしか言いようがない。ベイツ教授は、コーヴィル武官には1万2千虐殺の嘘が言えなかったという証拠でもある。

次に虐殺写真があるのではないか、という人もいるかもしれない。しかし、あらゆる証拠写真と称されているもの(143点)を徹底検証した結果、ただの1点も南京の虐殺を証明するものはないことを『南京事件「証拠写真」を検証する』(東中野修道・小林進・福永慎次郎著)(草思社)が明らかにしている。国民党がニセ写真工房をつくって国内外にばらまいていたことも明らかとなっている。後述するAPがつかまされたニセ写真もその一つである。考えてみれば、虐殺現場で写真が撮れることがおかしいわけだ。

「Eyewitness to Massacre」(虐殺の目撃証人)という本がアメリカのM.E. Sharpe社から出版されている。南京にいたアメリカ人宣教師9人が家族などに出した手紙をあつめた資料集的な本である。松村俊夫氏がこれを精査してみたところ、この9人のだれも殺人を目撃していないことが明らかとなったのである。(「Eyewitness to Massacreの意味するもの」(『偕行』平成24年8月号) 虐殺の目撃者ではなく、虐殺がなかったことを証明するアメリカ人たちとなすけるべき本であったのだ。

毛沢東が生涯「南京虐殺」などといわなかったことも、案外意味のある証拠かもしれない。南京戦の半年後、延安で「持久戦論」を講義した時に「日本軍は包囲は多いが殲滅が少ない」と日本軍を批判しているが「南京虐殺」など言

っていない。もし「大虐殺」があったとしてそれを非難しないなどということが考えられるだろうか？

2005年に世界25か国で発売されベストセラーとなった『マオ』の中でユアン・チアンは、毛沢東が南京虐殺に触れていないと批判している。ありもしないことをもっともらしくあげつらうほど毛沢東はおろかではなかったということだ。批判されるべきは、よく調べもせずにプロパガンダを信じ込んでいるユアン・チアンの方であろう。

なぜ「南京虐殺」が生まれてきたのか

ではなんで「南京虐殺」などということが出てきたのか、と誰しも不思議に思うだろう。

国民党は記者会見など公式の場では、「南京虐殺」などという大ウソを言うわけにはいかなかった。当時日本は欧米諸国と戦争をしていたわけではないから、南京が安全になれば、各国の記者は取材に訪れる。そうすれば、虐殺など全くなかったことがばれてしまうからだ。そこで、裏宣伝、もしくは謀略宣伝という方法を国民党は使ったのである。外国人の利用である。中国に好意的な外国人、記者、宣教師、学者などを利用して彼らにウソを言いふらせる工作をしたのである。その中心人物が、マンチェスター・ガーディアン紙の記者ハロルド・ティンパーリであり、南京安全区国際委員会の中心メンバーで南京大学教授のマイナー・ベイツであった。

今では、ティンパーリは国民党工作員として雇われて資金を与えられて『戦争とは何か』という南京虐殺本をイギリスで出版したことが立証されている。そればかりか「トランス・パシフィック・ニュース・サービス」という国民党の覆面ニュースリリース会社の責任者としてアメリカで国民党のプロパガンダを行っていたことも分かってきた。このニュース・サービス社が流した「ニセ写真」をAPが使ったことがばれ、APが謝罪するという事件を越したことが1938年12月1日発行のLowdown誌にでている。戦前から中国はこんなことをやっており、ティンパーリは中立の記者どころかその中心的謀略部員だったのである。

ベイツは、ティンパーリの『戦争とは何か』にウソ情報を送った張本人であり、埋葬記録4万人のうち1万2千は民間人であると何の根拠もなく言い出した人物である。全くでっち上げの陥落直後の市内の虐殺ものがたりを南京を離れる新聞記者にメモで渡した人物である。そのメモに基づいて書かれたニューヨーク・タイムズとシカゴ・デイリーニュースの記事が酷似しているのはそのためであることを東中野教授は証明している。そもそも南京市内でそんな虐殺などなかったのだから、両記者が同じような記事を書けるはずがないわけであ

る。

彼は東京裁判でも1万2千人虐殺証言を行った人物である。中国政府顧問で、2回も勲章を授与されていることが立証されている。

日本が何も言えなくなり、逆に中国はなんでも一方的なことが言えるようになった戦後になって、こうしたウソネタを10倍、100倍にも膨らまして「いわゆる南京虐殺ものがたり」をでっち上げたのである。

さらに、昭和21年2月付で中国政府は「南京地方法院検察処敵人罪行調査（日付なし）なるものを東京裁判に提出してきた。そこでは被殺害確数34万人となっている。もっとも列記されている死者の数を足していくと279,586名になるというずさん極まりないでたらめ資料であるが、これが南京事件裁判の基本資料となったのである。

これは、広島・長崎への原爆投下による死者二十数万に匹敵する数字を何としてもほしいGHQ（実質アメリカ）の要請にこたえて、中国政府が提出したものであろう。ともかく、南京虐殺30万などという全くの虚構が東京裁判のお墨付きを得てまかり通ることとなったのである。

荒唐無稽な虐殺ものがたり

一方的な言い分が堂々とまかり通ることになると、様々な「南京虐殺ものがたり」がつくられてくる。

アイリス・チャンの『The Rape of Nanking』から、いくつかの荒唐無稽物語を取り出してみよう。（日本語訳は自由主義史観研究会）

四肢切断： 日本兵は支那人の内臓を取り出したり、首を切ったり、手足を切断したりしただけではなく、もっとひどい色々な拷問を加えた。日本兵は南京市の各所で、捕虜を板に釘付けにし、戦車で轢き、木や電柱に磔にし、体から長い肉片を切り取り、銃剣による刺殺練習に使った。少なくとも百人の男が目を抉り取られ、鼻や耳を切り取られ、その後火を付けられた、と伝えられている。別の二百人の支那の軍人や民間人は、裸にされ、ある学校の柱や扉に縛りつけられ、針で口、喉、目など体の数か所を刺された。（原文 p.87）

火あぶり： 日本兵は火を使った遊びを案出した。その一つは、支那人の群衆を建物最上階または屋根にまで上らせ、階段を破壊してしまい、一階に火をつけて楽しむというものであった。多くは窓または屋根の上から飛び下りて自殺した。支那人に燃料をぶっかけ、撃ち、彼らが炎の中で爆死するのを見て楽しむ、というものもあった。悪名高い例としては、女子供を含め何百人もの人を広場に連れ出し、ガソリンでずぶぬれにし、機関銃で撃って点火するというものがあつた。（原文 p.87-88）

犬責め： 悪魔的な拷問の一つに、支那人を腰までうずめ、ドイツ種のシェパードが支那人を噛み千切るのを見物するというのがあった。目撃者によれば日本兵は支那人の一人を裸にし、体の敏感な部分をドイツ種のシェパードにかませたという。犬はその支那人の腹を切り裂いただけでなく、腸を取り出して地面に放り投げた。(原文 p.88)

上記の事例は日本兵が支那人を責めるのに使った方法のごく一部に過ぎない。日本兵は犠牲者を酸で浸したり、赤子を銃剣で突き刺したり、何かを舌に引っかけて人間を吊るしたりした。後に南京虐殺を調査したある日本人記者は、支那人の心臓と肝臓とを取って食べた日本兵が少なくとも一人はいることを知った。生殖器でさえ食用にされたようである。(原文 p.88)

強姦： 日本兵は老齢の女でも構わなかった。若くはない既婚夫人や、祖母や曾祖母が何度も性的な攻撃を受けた。60歳の女を犯した日本兵は「その女の口で男根を洗う」よう命ぜられた。62歳の女が年を取っているから性行為はできない、という、日本兵は「強姦せずに棒を突き入れた」。

日本兵の老女に対する扱いがひどいものであったとすれば、少女に対する扱いは想像を絶するものであった。年少の少女は無惨にも強姦され、中にはその後何週間も歩けなくなってしまったものもいた。手術を要するものも多かったし、死んだ者も多かった。支那人の目撃者によれば、日本兵は路上で10歳未満の少女を犯し、刀で二つに切ってしまったという。うまく強姦するために、13歳にも至らない少女の陰部を切り裂いたという例もあった。(原文 p.91)

この想像力はどこから来たのか？

虐殺やそれに類することなど南京で起こってはいなかったことはすでに実証した。にもかかわらず、これほどもっともらしく虐殺ものがたりを語るのということは相当の想像力、捏造力に中国人が富んでいるということになる。

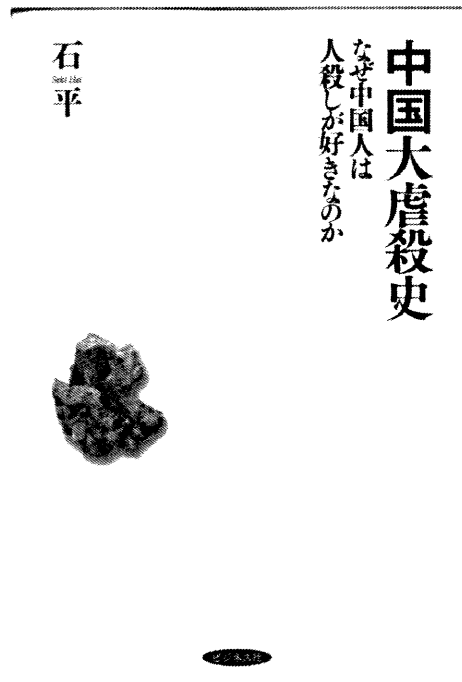
しかし、ちょっと考えてほしい。本書で述べているように、実際に起こった通州事件では、ここに書かれているようなことがほとんどそのまま起こっているということである。つまり、このウソ物語を創作した中国人は、別に特別な想像力、創作の才能があつてのことではなく、中国人が実際にやってきたことをもとにして物語を作ったということなのだ。本歌取りをやったに過ぎないということなのだ。カニが自らの甲羅に合わせて作ったあなが南京虐殺ものがたりであるということである。

中国の虐殺文化の伝統

我々は、中国も日本と基本的には同じような文化伝統の国であると思いがち

であるが、それは大きな錯覚である。特に「虐殺」ということになると、中国は日本とは全く異なる伝統文化を持っているということである。

『中国大虐殺史—なぜ中国人は人殺しが好きなのか』(石平) (ビジネス社) という本がある。中国出身でその歴史に詳しい石平氏の著作である。



秦朝以来行われてきた大量虐殺、謀殺の歴史を述べ、なんと共産中国にまでその伝統が続いていることを明らかにしている。政権樹立直後の1951年には「反革命分子鎮圧運動」で71万人を全国各地で即時処刑している。その後大躍進、文化大革命で何千万の自国民を殺害したことは広く知られている。文革では、生徒が教師、校長をつるし上げ、殴打し死に至らしめるという残虐行為が当たり前に行われた。次のような事例も出てくる。

『毛沢東の文革大虐殺』が引用した目撃者の記述によれば、次のような殺し方をされたという。

「内モンゴル物資局の金雪雲同志は共産党員だったが、下手人どもにヤットコで歯を一本一本抜かれ、鼻と耳をねじ切られ、…ついに下手人どもに腰の骨を折られて死んだ。

伊克昭盟の小白秀珍同志は殴られ瀕死の状態にされたうえ、悪事の限りを尽くすその暴徒たちに輪姦され、そのあと火掻き棒を膣に差し込まれて腸を引きずり出されるというむごたらしい死に方をした。」(同書 p.108)

アイリス・チャンの南京虐殺ものがたりの記述とそっくりである。通州事件でも似たようなことが起こっている。しかもこれは、1967年から68年にかけて起こったことなのである。まさに中国虐殺文化伝統のDNAを見る思いである。

南京についての記述も引用してみよう。

太平天国の乱とそれこそ本物の「南京大虐殺」

(曾國藩の) 幕僚の一人である趙烈文は『能静居士日記』の中で、南京住民に対する湘軍の虐殺を証言している。

「わが軍が金陵に入城して数日間、民間人の老弱した者、あるいは労役に使えない者たちは悉く惨殺され、街角のあちこちに屍骸が転がった。子供たちも斬殺の対象となり、多くの兵卒たちが子供殺しをまるで遊戯を楽しんでいるか

のようにしまくった。婦女となると、40歳以下の者は兵卒たちの淫楽の道具となるが、40歳以上の者、あるいは顔があまりにも醜いものはほとんど、手あたり次第切り捨てられてしまった。…

湘軍とともに天京（南京）に攻め入ったある外国人傭兵が城内での目撃談を「インドタイムスで語っている。

「…兵士たちはまず、若い女性たちを捕虜の群れから引きずり出した。彼女たちをその場で凌辱したのちに、周りで見物している町の破落戸たちに手に渡して輪姦させるのである。その間、兵卒たちはにやにや笑っているが輪姦が一通り終わると、全裸にされた女たちの髪の毛をつかんで人たちで切り殺してしまうのだ。

それからが男たちの殺される番である。彼らは全員、小さな刀で全身の肉を一片一片切り取られて殺される。何のためかはよくわからないが、心臓は、ひとつずつ胸の中から丁寧に抉り出されて、用意された容器に入れられるのである。

次に子供たちが母親の前で殺され、母親たちも同じ運命となる。しかし、私には、そこまでの殺しの場面をここで語る勇氣はもはやない。とにかくそれは、私が生まれて以来目撃した数多くの際どい光景の中でも最も恐ろしいものであった。（同書 p.182-184）

日本では歴史上こんなひどい虐殺は起きていない。日本の歴史上、最も残虐な事件とされているのは、豊臣秀吉が謀反を疑って養子の関白秀次に切腹させ、その妻妾子を処刑したことだ。その時でも死者を辱めるようなことは行っていない。中国虐殺伝統とは格段の違いである。

宣伝戦の哀れな犠牲者

ところが、“通州事件＝真実、南京虐殺＝虚構”という事実を東京裁判以来の宣伝、言論統制、洗脳にすっかりやられてしまい、“通州事件＝宣伝、南京虐殺＝真実”と信じこんでしまっている日本人がいる。

一つの典型例が漫画家の中沢啓治である。『はだしのゲン』という漫画で、日本軍がこんな虐殺行為を行ったと「信じ込んで」まさに恥ずべき大ウソを書いている。（図参照）本人は、良心的なつもりなわけである。そしてこれを支持する教育界の多くの人々のおかげで、ほとんどの学校でこの言ってみれば犯罪的な漫画本が公然と置かれているのである。宣伝戦の哀れな犠牲者であることにいまだに気が付かないで、このような愚行を行っているのである。

左翼の一部の人間だけがこういう無知、錯覚に落ちているわけではない。教科書でも南京虐殺は「あった」ということで検定は通るのだ。その一方で、